

NGO による移民の子どもに日本語を教える取組み

東京都品川区の閑静な住宅街に外国人児童の通う「学校」が佇む。ここは、NPO 法人 IWC 国際市民の会が運営する外国人児童の学習支援の場だ。IWC では日本人と外国人の共生に向けた活動の一環として、小中学校に通う外国人児童のための補習授業を行っている。私たちが訪ねた日は、品川区立立山中小学校の一室で、きれいな金髪の少年がひとりで授業を受けていた。学校のチャイムが教室に響き渡る。「起立、気を付け、礼」。日本の小学校ではおなじみの挨拶を、少年は完璧なイントネーションでこなす。そして、「先生、ありがとうございます！さあ給食だ！」と無邪気な笑顔を浮かべ、教室をあとにした。

先生の言っていることがわからない。授業についていけない——。これは日本に滞在する外国人児童の多数が直面する現実である。文部科学省が平成 18 年に行った外国人の子どもの不就学実態調査によると、学校に通わなくなった主な原因は、日本語の能力不足であることがわかった。これは経済的な理由と並んで多い回答であった。

また、神奈川県国際言語アカデミアの職員は、「日本語でコミュニケーションを取れないことが外国人児童へのいじめを招いている」と指摘する。

2010 年の文部科学省の調査によると、現在公立の小・中・高校に在籍する日本語指導が必要な外国人学生は 28,575 人にのぼる。高校進学率に目を向けると、例えば静岡県浜松市では、2008 年における日本人の高校進学率が 96.8%であるのに対し、外国人は 73.7%にとどまっている。

彼らが日本語を満足に勉強できない原因の 1 つとして、日本の義務教育制度における外国人児童へのサポートが不十分であることが考えられる。現在のところ、そのようなサポートは市区町村ごとに行われている。そのため、外国人生徒を受け入れる際の基準が統一されていない。どの学年で受け入れるかを年齢で決める場合もあれば、日本語の能力で決める場合もある。

一部の小学校では、日本語に不安を抱える生徒に日本語を教えているが、明確な指導カリキュラムはなく、専門の教師がいるわけでもない。その結果、指導内容は教師個人の経験と熱意に左右されてしまうのが現状だ。日本において外国人児童は未だ少数であり、義務教育の現場で十分なサポートを望むのは難しい。

このような状況の中で、IWC は文化庁の委託事業として外国人児童の高校入学支援を行っている。2007 年度から 2012 年度までの統計では、IWC に在籍する児童全員が高校に合格した。これは先に挙げた外国人児童の高校進学率（浜松市）と比べると、大き

な成果といえる。大学に進学する者も多いという。

小中学生も、来日して3か月程度で日本語を話すことも書くこともできるようになる、と理事長の伊藤美里さんは胸を張る。

IWC で開講されている小中学生向けの授業は、品川区立山中小学校の教室を使って行われている。各小中学校に通う外国人児童たちが、年齢や学年に関係なく、それぞれの日本語習熟度に合ったクラスで勉強する。日本語のテキストは、どのクラスでも同じ1冊を使う。また授業も個々のペースに合わせて、楽しく行っているという印象を受けた。このような成果の秘訣は、どこにあるのだろうか。

IWC が重要視しているのは、発音やイントネーションをきれいに直すことと、正しいマナーや言葉づかいを身につけさせることだ。日本語を単なる最低限のコミュニケーションツールとして用いるだけではなく、その場に即した言葉の選択を外国人児童が身につけることによって、日本社会に受け入れられやすくなると IWC は考えている。就職活動や入学試験の面接で成功するためにも、この点はとても重要だという。

もう一つのカギは、日本語で自分の気持ちを伝える術を身につけさせる指導をしていることにある。日本語を新しい言葉としてとらえるのではなく、子どもたちの頭の中にある考えを日本語に「おきかえてあげる」というスタンスで指導している。彼らが日本語で自分の気持ちを相手に伝え、議論し合えるようになることが目標だ。そのため IWC では、自由なテーマで子どもたちに作文を書かせている。この取り組みを毎日続けることで、確実に成果を挙げている。

結果として IWC に通う子どもたちは日本語を話せるようになるだけでなく、日本社会に溶け込むことに成功しているのだ。

外国籍だから、日本語がわからないから、といった理由で子供たちが学校を中退してしまうことも珍しくない。そんななか、NPO 法人や市民ボランティア、地方自治体などが主体となり、国の手が行き届かない外国人児童の教育支援を担う動きが着々と広がっている。しかし依然として、そのような支援を受けられずにいる外国人児童も多く存在する。その事実を無視するには、子どもたちの笑顔はあまりにまぶしすぎるのではないだろうか。